

訃報

哀惜

北海道新聞 どうしん 電子版

## 篠田悠一さん（富良野協会病院名誉院長） 10月5日死去 73歳 地域医療の大切さを説き続け

12/25 17:00



山部診療所で診察する白衣姿の篠田悠一さん。富良野市の広報誌で使われた写真だが「お父さんらしい」と子どもたちが遺影に選んだ＝2015年10月（富良野市提供）

「医者がいないところに人は住まない」

2004年度導入の臨床研修制度の影響で、地域の基幹病院である富良野協会病院でも、07年に消化器系の常勤専門医が一時不在になった。その取材の際、怒りのこもった声で言った。

05年から2年半の富良野支局員時代、妻の信子さん（69）も交えて何度も酒席を共にした。しかし語気を荒らげたのはこの1回だけ。温厚な人柄に朴とつとした語り口。だからこそ、この時のことが忘れられない。

愛知県生まれ。高校まで夕張市で過ごした。炭鉱の閉山で「人がいなくなる寂しさ」を体験し、「無医村の医者になる」との思いを強くした。北大医学部（第1外科）を卒業。1979年から2009年まで富良野協会病院に勤務し、このうち08年までの14年間は院長を務めた。

「（大病院への）集約化ばかりではダメ。地域には町医者的な医療も必要」と地域医療の大切さを説き続けた。15年には富良野市に請われ、無医地区となっていた山部の診療所の所長に。がん再発後も診察を続け、亡くなる2カ月前まで働いた。

窓から芦別岳が望める市内の自宅はいつもにぎやかだった。交流のあった講談師の神田山陽さんら文化人が富良野を訪れた際は、自宅で1日限りの独演会を開き地域住民を喜ばせた。全国で初めてNPO法人の設立認証を受けたふらの演劇工房の初代理事長を務め、文化によるマチづくりにも信子さんと一緒に取り組んだ。「日本中の人たちが感動を求めて富良野にやってくる。そんなマチづくりが理想」と語っていた。富良野に根ざし、富良野が大好きな人だった。（生活部 根岸寛子）